

魅せられて、 私の「歌」道標

夢の時間



佐伯裕子

古い写真をひっぱり出して見ていたら、なんだか寂しくなった。

一九七六年に、短歌誌「未来」に入会したはずなのに、それからの四、五年間の写真がほとんどない。歌会にも出席せず、たまに新年会に赴いても、みんなと写真に収まるのが気恥ずかしくて、逃げてばかりいたからだ。生まれたばかりの息子を抱えているスナップなど、日常に生きる場面は何枚も残っているのに、「歌の場」に生きるわたしの姿がない。

七十年代の後半、二十代も終わろうとしていたころである。東京、千葉、木更津、横浜、そして東京と、四年間に家移りを五回した果てに、気がついたら、二人の息子を抱えて呆然とする自分がいた。仕事もなく、友人とも離れた小さなアパートの一室で、わたしは街にいる人々に声を放ちたくて仕方なかった。日々、わたしの唇から洩れる言葉といったら、赤ん坊への喃語と泣き言ばかりだった。

「奥さん」でも「おかあさん」でもない、わたし個人の名前を呼ばれる外側の世界と、生きた交流をしたかった。白くて狭い壁のなかで、少しずつ閉塞の思いがつのついていたのだろう。短歌と出会っ

たのは、そんな日々である。といっても、恋のように、目の醒めんばかりの出会いをしたわけではない。

ある夕ぐれ、寺山修司の直弟子だったと自称する競馬記者と短歌の話をした。わたしは当時、夕刊紙の記者ばかりが住むアパートに住んでいたのである。彼は、酔うほどに、寺山の青春短歌をうたいあげ、あげくの果てに、それを猥歌に作り直して高吟する。酔いどれの、錆のある蛮声には、遠く坐礁した青春の夢が淡々と漂っていた。聞いているうちに、わたし自身の失われた時間までが、そこに魅せてくるようだった。彼の猥歌はすぐに失念してしまっただが、寺山の歌はつよく心に刺さったまま離れなかった。

森駈けてきてほりたるわが頬をうずめ
むとするに紫陽花くらし

寺山修司

とびやすき葡萄の汁で汚すなかれ虐げら
れし少年の詩を

海を知らぬ少女の前に麦藁帽のわれは両
手をひろげていたり

そら豆の殻一せいに鳴る夕母につながる

われのソネット

学生時代に、「勉強」として習った古典和歌とは違う、みずみずしい青年の息吹きが伝わってきた。狭いアパートの壁のなかにいても、現実とは別の夢の時間が創りだせる。そんな気がして、わたしは、寺山ふうの歌をノートに書き溜めた。育児に追われていて、長いものが書けなかったから、短歌の短かさはちょうどよかったのかもしれない。

創作とは不思議なものである。拙いながらも作り溜めていると、かならず誰かに読んでもらいたくなる。徹底した自己否定に生きる人ですら、その誘惑に勝てるものは少ないだろう。表現とは、生存本能そのもののように思えてならない。わたしは、閉塞していく自分を、なんとかして生かしたかった。

亡くなった前田透選の「ミセス歌壇」に投稿したのが、活字になった初めての一首である。地平線に向日葵が咲いている、といったイメージの歌だった。よほど寺山修司に参っていたにちがいない。そんなある日、また、くだんの記者が来て、「未来」という雑誌への入会を勧めてくれた。本人は、短歌をとつくにあきらめていたから、「未来」とは何の関係もないはずなのに、実に熱心に勧めてくれた。

「未来」には、寺山修司と岡井隆がいるからね」と、あやふやな情報を吹聴して酔いつぶれた競馬記者。彼が、わたしを短歌にひき

会わせた最初の人だった。

「未来」に入会してみると、寺山は論外のこと、そのうえ、「岡井隆」も不在だった。わたしは岡井の、難解でラジカルな『現代短歌入門―危機歌学の試み』を読みながら、その不在が、かえってふさわしい謎のように感じられた。運命などと、大袈裟な言い方はまったくおこがましい。でも、人それぞれの人生には、分岐点という曲り角が確かにある。わたしは、彼らのいない「未来」で、戦後短歌の先達である近藤芳美、そして大島史洋に出会った。わたしの歌の方向を決定する師として、出会ったのである。

早春の雲浮く玻璃を磨くなりいつも二十
歳の母と並びて

くびられし祖父よ菜の花は好きですか網
戸を透きて没り陽終わりぬ

陽のかぎり誰か揺りにしブランコをぬば
たまの夜はわれが揺るも

ノートに書きつけたのはこんな歌だった。不思議なことに、現実には格闘中の育児の歌はほとんど作っていない。当時の「現在」をうたわずに、そこに至るまでのわたしの固有の時間をうたいたいかつた。過ぎ去った時こそが素晴らしく、その一瞬々々が、ふたたび歌となつて甦ってくるのを待った。狭い壁のなかで繰り広げられる日常の出来事は、わたし固有の時間ではないように思われたのだ。誰もが共有する育児と生活の場に埋没する日々に、大きな関心を抱くこと

ができなかった。過去の時間こそが、やっとわたしだけのものとなった。「現在」なのだと感じられた。それは、歌を作ることを感じ始めた、変な感覚といっている。

競馬記者氏の愛読書の一冊、寺山の『馬敗れて草原あり』に、印象深い箇所があった。

近ごろ、私は電子計算機による「競馬予想」ということに興味をもっている。電子計算機による「競馬予想」は、いわば科学によって偶然を裁くたくらみである。(略)コンピューターの役割は「勝ち馬を推理することではなく、「レースが終る前に勝ち馬を教える」ということである。それは、いわば展開するレースの時間を追い越して、結果だけを先に発表してしまふことであり、しかも、その勝利に「必然性」を見いだすことである。そこには、レースを分析してゆく科学的な大時間だけが存在し、個人個人の選択してゆく運命的な小時間などは、存在しなくなくなってしまふことが意味されている。

「私の競馬ノート」

「レースを分析してゆく科学的な大時間」と、「個人個人の選択してゆく運命的な小時間」……歌から固有の私性をとり除こうとした寺山の作品を重ねて読める一節だ。時代の尖端を嗅ぎとる鋭さは、いま読んでも新しい。そこには、科学的な大時間に惹かれながら、ついにその大時間に呑みこまれていく人間の姿が暗示されていよう。

この箇所を線を引いているから、よほど感心したものと思われる。当時のわたしにとっては、壁のなかで繰り広げられる日常の方が科

学的な大時間に相当しており、過ぎ去った時間のみが、わたしの運命的な小時間だった。少なくとも、コンピューターの競馬予想への寺山の興味を、大いなる現代への反語として読んだのである。

わたしは歌を作ることによって、さり気なく過ぎたかに見える過去の時間を掘り返すことになった。わたしがどこから来て、いったいどこへ去っていくのかを、執拗に考えはじめた。

*

わたしが、子供時代に抱いた得体の知れない不安は、決して解消したわけではなかった。あたかも消えたように見えたのは、単におとなになったからに過ぎない。敗戦後の、木造建てる暗い廊下の向うに、ぼうっと吊るされている幻影、会ったこともない祖父の首、それが当時の不安のすべてだった。

子供のころに、おとなの囁きのなかから聞きわけた「絞首刑」という死に方……。東京裁判で、背負いきれない罪状のもとに下された、祖父への判決と刑の執行の話である。その幻影は、電燈の傘の揺れ方ひとつにも、あるいは長く軋む階段をのぼっていくときにも、ゆらゆらとしてわたしを襲ってきた。十三階段をのぼって奈落に落ちる瞬間を、わたしは何度空想してきたかわからない。絞首刑という死に方が、しんそこ怖かった。

凝った二十余年間、歌を作るとともに一息に吹き出してきた。

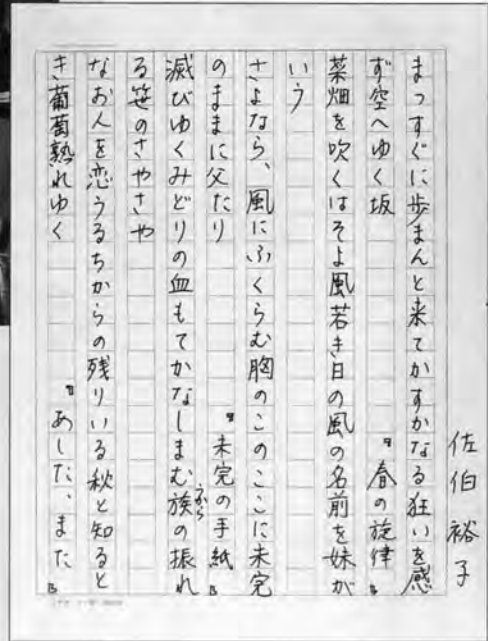
歌はバンドラの箱でもあったが、同時に、奇妙な事実を教えてもくれた。いやでいやで飛び出してきた古い家だったので、その臭いまでがわたしを生かしていたことを知ったのである。暗い空想のあえぎに、青い黴の生えた壁に、わたし固有の時間が流れていたのだ、と。



未来浜松大会（1987年）
左から山田富士郎氏、大辻隆弘氏、筆者、源陽子氏。

佐伯裕子
(さえき・ゆうこ)

1947年、東京に生まれる。1976年、「未来」入会。近藤芳美、大島史洋に師事する。歌集に「春の旋律」、「未完の手紙」（第二回河野愛子賞）、「あした、また」。エッセイ集に「影たちの棲む国」がある。



祖父おおぢの処刑おぢのあした酔いしれて柘榴ざいりゅうのご
とく父はありたり
遅れても遅れてもなお春潮の夜半はしず
かに帆を張りていん
夢みるは死ぬるにひとしやわらかな荔枝れいし
の穢けがれもふかみていたり
月光に浮きていたりし父祖の顔あれば蝶
ではなかつたらうか
お母さんあなたの笑う声がしてきらきら
羽虫はむしのこぼれていた

傍らそばで泣き叫ぶなみ穢児せいごの息子ふたりに、ミルクを与え、おむつ
を取りかえながら、わたしもほとんど泣き叫んでいた。育児ノ
イローゼも手伝って、そんな日々の現実にはむしろ夢としか思え
なかつた。アパートの白い壁のなかに、わたしは、別の夢の時
間を創造していった。歌が誘いだす、祖父や父や母、そしてい
まはないすべてのものたちこそが、真の現実のように思われて
いた。

そしていま、出来あがった歌たちが、人々に何ほどのものを
伝え得たのかと、つくづく考えこむ。「歌の場」に生きるわたし
の姿が、見えないのである。